

日本の名著

MAINICHI



LIBRARY

毎日ライブラリー

日本の名著

毎日新聞社編

毎日新聞社刊

毎日ライブラリー

—日本の名著—

昭和二十六年五月一日印刷
昭和二十六年五月五日発行

定価 二五〇円

編者 毎日新聞社図書編集部

発行者 谷 水 真 澄

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 宮本製本所

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一ノ二一
大阪府北区堂島上二ノ三六
門司市清滝町一ノ九〇二
名古屋市中村区堀内町四

凡 例

一、「日本の名著」「世界の名著」は姉妹編として共通の方針のもとに編集した。

一、項目の選定は、国民教養として必読のものを集め、これに中学校、高等学校の国語教科書に載った作品を検討して、参考書としての役割を果たすようにくふうした。

一、全体を通読すれば、名著の系列によって思想と文芸の流れをくみとることができる、書名索引によって、頁を開けば、名著解題の辞典として活用することができる。

一、各項はおおむね次の順序によって記述した。

1 作品名 種別 著編者名（生没年）

2 梗概および解説

3 参考 発表時期および方法 流布本 研究書

一、またこの本に載った書名（または作品名）の出てくる場合は、その項目を参照すべき場合が少なくないので特に*印をつけた。

目次

古典編

古事記	一
万葉集	四
懷風藻	九
古今和歌集	二
竹取物語	一五
伊勢物語	一七
土佐日記	一九
往生要集	二
落窪物語	三
蜻蛉日記	五
枕草子	七

源氏物語	三〇
榮華物語	三六
堤中納言物語	三七
更級日記	四〇
梁塵秘抄	四二
今昔物語	四三
大鏡	四五
新古今和歌集	四七
山家集	五一
金槐和歌集	五三
歎異抄	五五
平家物語	五七

方丈記	六
熊野(謡曲)	三
世阿弥十六部集	五
狂言記	六
徒然草	七
太平記	七
一寸法師(お伽草子)	七
好色一代男	七
日本永代蔵	七
奥の細道	八
芭蕉七部集	八
去来抄	五
国姓爺合戦	八
心中天の網島	九
仮名手本忠臣蔵	九

蕪村七部集	九
雨月物語	九
黄表紙	一〇
俳風柳多留	一〇
玉勝間	一〇
雲萍雜志	一〇
折たく柴の記	一〇
鳩翁道話	一〇
日本外史	一一
南総里見八犬伝	一一
修紫田舎源氏	一一
春色梅児誉美	一一
東海道中膝栗毛	一九
良寛歌集	二三
おらが春	二四

浮世風呂……………三七

東海道四谷怪談……………三九

天衣紛上野初花……………三三

現代編

學問ノス、メ(福沢諭吉)……………一四

小説神髓(坪内逍遙)……………一五

浮雲(二葉亭四迷)……………一七

金色夜叉(尾崎紅葉)……………一四

五重塔(幸田露伴)……………一四

たけくらべ(樋口一葉)……………一四

高野聖(泉鏡花)……………一四

内部生命論(北村透谷)……………一五

武藏野(国木田独步)……………一五

不如帰(徳富蘆花)……………一五

田舎教師(田山花袋)……………一七

破戒(島崎藤村)……………一六

夜明け前(島崎藤村)……………一六

雁(森鷗外)……………一六

阿部一族(森鷗外)……………一六

吾輩は猫である(夏目漱石)……………一七

三四郎(夏目漱石)……………一七

ころも(夏目漱石)……………一七

藪柑子集(寺田寅彦)……………一八

銀の匙(中勘助)……………一八

腕くらべ(永井荷風)……………一八

あらくれ(徳田秋声)……………一九

何処へ(正宗白鳥)……………一九

土(長塚節)……………一九

人間万歳(武者小路実篤)……………一九

暗夜行路(志賀直哉)……………一九

或る女(有馬武郎)……………二〇一

竹沢先生と云ふ人(長与善郎)……………二〇三

修禪寺物語(岡本綺堂)……………二〇六

細雪(谷崎潤一郎)……………二〇八

田園の憂鬱(佐藤春夫)……………二二

羅生門(芥川竜之介)……………二二三

父帰る(菊池寛)……………二二六

同志の人々(山本有三)……………二二七

出家とその弟子(倉田百三)……………二三〇

海に生くる人々(葉山嘉樹)……………二三三

紋章(横光利一)……………二三四

雪国(川端康成)……………二三七

風の又三郎(宮沢賢治)……………二三八

菜穂子(堀辰雄)……………二四一

お化けの世界(坪田譲治)……………二四四

生活の探求(島木健作)……………二四六

歌よみに与ふる書(正岡子規)……………二四八

春夏秋冬(正岡子規)……………二四九

藤村詩集(島崎藤村)……………二五三

海潮音(上田敏)……………二五七

白羊宮(薄田泣菫)……………二五九

有明集(薄原有明)……………二六一

一握の砂(石川啄木)……………二五三

みだれ髪(与謝野晶子)……………二五五

思ひ出(北原白秋)……………二五七

別離(若山牧水)……………二五九

赤光(斎藤茂吉)……………二六一

道程(高村光太郎)……………二六四

月に吠える(萩原朔太郎)……………二六六

一年有半（中江兆民）	二六
茶の本（岡倉覚三）	二七〇
余は如何にして基督信徒となりし乎	
（内村鑑三）	二七三
善の研究（西田幾多郎）	二七四
三太郎の日記（阿部次郎）	二七七
象牙の塔を出て（厨川白村）	二八〇
偶像再興（和辻哲郎）	二八三
あとがき	二八五

索引

古 典 編

古事記

歴史書

太安麻呂編（第八世紀初）

その「序」によると、天武天皇が諸家に伝わっている帝紀および本辭（皇室の系譜と神話・伝説）がすでに正実に違い、多くの虚偽を加えているので、これを検討して今のうちに国家を治めるための原理を定めてこれを後世に伝えようと考え、当時二十八歳になる稗田阿礼という舎人に命じて、「帝皇の日繼及び先代の旧辭」を「誦み習」わしめた。が、その後天皇の崩御あり、いまだこれを一冊の書に完成せしめられずにいたのを和銅四年（711）九月十八日、太朝臣安麻呂が、元明天皇の勅命を受けて、稗田阿礼のよむところを選録し、約四ヵ月かかって完成、和銅五年正月二十八日献上したのが本書であるということである。

本書はこの「序」を巻頭に、上中下三巻より成っている。「序」は一時偽書説もあったが、今日では一応太安麻呂の筆になるものと信ぜられている。この「序」は六朝ふう

の美しい四六駢體でしるされているが、本文は独得の書き方で、『日本書紀』の純粹なる漢文体とはきわめて著しい対照を示している。

上巻ではまず、いわゆる造化の三神（天御中主神・高御産巢日神・神産巢日神）の出現より筆をおこし、神々の系譜を語って伊邪那岐、伊邪那美の二神の出現にいたり、以下この二神による国土の創造・万象の発生・三貴子（天照大御神、速須佐之男命、月読命）の誕生・二神の抗争・天岩屋戸の事件・八俣大蛇の退治・大国主命の恋愛事件と、これに関連して稲羽の菟の話などの一連の出雲系神話がつづき、いわゆる天孫降臨および国譲りの交渉などを経て、火照命および火遠理命の海幸・山幸の説話にいたっている。

以上の通り、上巻は人代に対する神代の神話・伝説を収録したものである。これらの諸神話ないし伝説は、いずれも日本国家の起原と、その支配者としての天皇家の起原を説くために用意せられたものであるが、われわれはそうした編集者の意図にもかかわらず、ここにさまざまな神話学的な資料を見いだすことができる。

中巻は、神武天皇より応神天皇にいたるまでの期間である。すなわち、神武天皇の東征の事情より筆をおこし、綏

靖天皇より開化天皇にいたる八代の帝紀および部族の系譜が物語られるが、以下各天皇の治世における主要なる事件、たとえば崇神天皇代の神社の設置、四道將軍の派遣および地方豪族の反乱平定、税の制定、垂仁天皇代の沙本比古王の反乱および沙法毘売にまつわる悲劇、景行天皇代の倭建命の諸国平定の武勳物語およびその悲劇的な死、成務天皇代の地方区分の制定と県主の設置、仲哀天皇代の神功皇后の外征、応神天皇代の百濟の入貢、二皇子の皇位互讓事件、埴化族の祖天之日矛（新羅の王子）に関する物語、秋山之下米壯夫、春山之霞壯夫二兄弟の說話などが物語られている。中巻は少なくともこの書の編集者の意識では、すでに歴史時代にはいったものであつて、いわゆる史実に即しての執筆ということになるであろうが、依然としてその世界は神話的・伝説的な空氣が強い。しかし語られるこれらの事件・物語を通して、われわれはそこに具体的に大和朝廷の權威が確立してゆく過程をかなりいきいきとうかがうことができるであらう。

下巻は仁德天皇より推古天皇までの期間である。以下主要事項を挙げれば、まず仁德天皇代におけるかの有名な賦役免除の件、黒比売・八田若郎女らと天皇との恋愛交渉お

よびこれに対する大后石之比売命のやきもちなど、この戀愛には幾多の美しい歌謡がちりばめられている。元恭天皇代には採湯による氏姓の整備、皇子木梨之輕太子と同母妹輕大郎女との恋愛悲劇、安康天皇代の大長谷王（のちの雄略天皇）と大日下王の妹との縁談と根臣の讒言、日朝王の謀反と大長谷王の武勇談、佐佐紀山君の祖、韓袋のすすめによる狩獵、意富祁王、袁祁王の逃亡など、主として大長谷王を中心とする物語であり、雄略天皇代には引田部赤猪子の話とその他の說話にまつわる美しい古代歌謡の数々が記録され、清寧天皇代には皇位繼承者発見の事情などが挙げられている。

以上概観したところによつても知られるように、『古事記』はすでに大和朝廷の權威が確立し、皇室もその地位を確保し、文化的にも一つの頂点を示している奈良朝も元明天皇の代にはいつて完成されたものである。したがつて、その内容とするところは、編集者に一定の史観があつて、その編集をすすめたもので、序文中「偽を削り、実を定め」とあるのは、それを示したものにほかならない。すなわち、幾多の伝承を、皇室の尊嚴と絶対とを史的にもあきらめ、かつこれを将来にも確立しようとして取捨選択したもので

あった。したがって、われわれは本書によって逆に編集當時の政治意識・文化意識の反映をそこに見いだすことができるのである。ゆえに本書の示すすべての神話・伝説がそれらの置かれた地位に当初よりあったのではなく、たとえば最初に出現する造化三神のごときは、きわめて抽象的な神格であつて、おそらくは相当後世になつて考えられたものであらうし、登場する種々の英雄の行爲も、決して、ひとりの英雄の行爲ではなく、おそらくその英雄によつて代表される部族の幾つかの行爲がまとめて物語られていることもあらうし、また逆に一つの行爲や事件がそれにふさわしい英雄の名を求めて、この英雄の名に仮託されて物語られていることもあらう。しかし、またこれらの素朴なる物語のなかにも、はやくも外国（主として中国）の思想や文化の影響もうかがうことができるのである。

奈良朝は政治の安定により国家意識の高揚した時期であつた。したがつてさまざまな文化的な事業をなしとげたが、史書編集もその大きな事業の一つであつた。『日本書紀』全三十巻・系譜一卷もその一つである。『書紀』は舎人親王以下太安麻呂も加わつてその編集に当たり、功なつて養老四年（七二〇）五月献上したものである。『書紀』は『古事

記』に比し、はるかに史書として史料重視の立場をとり、幾つかの異なつた伝承のある時は「一書に曰く」として幾通りも併記している。これよりさき、すでに国史編集は推古天皇の代に聖德太子により『天皇記』、『国記』が選ぜられたが、これらは亡失して今は伝わらず、したがつて『古事記』、『日本書紀』この二書を今日一括して『記紀』と呼んでいる）をもつて今日伝わる史書の初めとするのであるが、このことあつて以来、史書編集は国家の主要なる事業として意識されるにいたり、以後『六国史』、『日本書紀・続日本紀・日本後記・続日本後記・文徳実録・三代実録』の編集が各時代に継続して実行されることになつた。

なお『古事記』および『日本書紀』には数多くの歌謡が見いだされる。これらの歌謡は今日『記紀歌謡』と称して、わが国古代の歌謡研究の対象となつてゐる。『古事記』におよそ百十首、『日本書紀』におよそ百三十首あるが、両書に共通または類似のものを除くと、だいたい百九十首が数えられる。これらの歌謡は、いわばわが国の抒情詩の最初の芽ばえであり、多く謡物の性質を帯びたものであるが、これらの歌謡がその後形式・内容ともに洗練されて『万葉集』などにみるごとき抒情詩の完成を示すのである。しかし自然

と我とのまだ分化しない以前の古代人の率直な意識は、巧まずして美しい枕詞・序詞などとなって現われ、われわれ

はそこに素朴な美しさを見いだすことができるであらう。

次の歌は倭建命が旅中病を得て、はるかに故郷をしのんで歌った歌と伝えられるものであるが、『記紀』歌謡中の代表的佳品とされているものである。

そこより幸行まして能煩野に到りましし時に、国思はして歌ひ給ひしく

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる
倭し美し

また

命の全けむ人は 登薦 平群の山の 熊白樫が葉を
髻華に挿せ その子

と歌ひ給ひき。この歌は国思歌なり（以下略）

〔参考〕 流布本は有朋堂文庫、国史大系、日本文学大系、続日本古典読本。評釈については本居宣長『古事記伝』がかれの一生をかけた大著として有名である。

次田潤『古事記新講』は定評あり、また西郷信綱『古事記』（続日本古典読本）は通説に便利である。

研究書は津田左右吉『古事記及び日本書紀の新研究』

は名著として名高く、和辻哲郎『日本古代文化』も参考されてよい。

万葉集 歌集 編者未詳（第八世紀後半）

石激る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるか
も

この歌は『万葉集』巻八の巻頭をかざる志貴皇子の「權御歌」である。長い冬を送って、再び春にめぐりあつた者の味わうよろこびの感情を、雪解けの水によつて水量のかさんだ流が盛んなひびきを発して落下する、そのかたわらに色もさえざえと萌え出た可憐なわらびの姿に象徴させて歌い上げている。この歌をひとり静かに口ずさむ時、われわれはそこに『万葉集』の編まれた時代の人々のおおらかな生命の充足感と幸福感をさながらに味わうことができるのであるが、それとともに、この一首はまた『万葉集』そのものを象徴しているように思われるのである。

『万葉集』（マンヨウシュウと読む）はわが国古代文化の花が一せいにきらびやかに咲き出で、一つの頂点をなしている第八世紀後半に編集されたものである。全二十巻、

その巻々の構成は一樣ではなく、たとえば勅選の巻のようであつたり（巻一・二）、個人の私選歌集であつたり（巻五・十五・十七以下四巻）、東国の民謡集であつたり（巻十四）、伝説歌集であつたり（巻十六）、必ずしも整然としてはおらず、これを『古今和歌集』以下の勅選和歌集に比較する時はまだ十分整理されていず、統一のないものであるが、しかしまた、それだけにわれわれは、この集に当時のさまざまなスタイルの、さまざまな階級の人々の、さまざまな生活感情の、およそわれわれが詩に期待できるほとんどあらゆる種類の歌を見いだすことができるのである。

選者については、勅選集で橘諸兄、あるいは大伴家持、または最初に諸兄が選し家持がこれを継いだとか、種々の説が行われたが、結局はつきりとはわからないといったほうがよいであろう。その形態は前にも述べたように選出基準の異なる種々の歌集が、何びと（たぶん家持か）かの手によつて集められ、最後の整理を行わぬままに、現在にまで伝わつたものと考えられる。

歌数はおよそ四千五百余首で、その収載歌の時代的な幅も約四百五十年あるが、このなかでとくに万葉時代とも称せらるべきは舒明天皇から淳仁天皇までの約百三十年間で

あり、またこの期間を上昇期・最盛期・下降期と分けて考えることができる。また歌集とはいへ、そのなかには歌のみでなく、漢詩や漢文もあれば、日記や手紙などもあり、きわめてヴァリエーションに富んでいる。しかし主流は抒情歌で、ごく少数の敘事詩や敘景歌が含まれており、また歌のスタイルは短歌（五・七・五・七・七）がその大部分（九割以上）であり、それに長歌（五・七を重ねて、七で止める）が二百六十余首、旋頭歌六十一首（五・七・五を二度繰り返す）、仏足石歌体若干（五・七・五・七・七に更に七を重ねる）などがある。長歌はその後の歌集にもみられ、今日も一部に行われているが、しかし『万葉集』にその傑作が多数存在していることは、後世その比をみることでできない。長歌には、また多くの場合そのあとに「反歌」が付属していて、その長歌の持つ主旨を補足したり、またはまとめたたりしておる点も注意すべきであろう。そしてこの長歌はすでに『古事記』、『日本書紀』に発し、すでにその形の整つたものがあるが、とくに『万葉集』にはその最盛を誇り、のちには衰えていつて、時代の下降とともに今日みるごとく、大部分は、和歌といへば短歌をさすようになつてくるのである。

さて、その内容は、すでに集中に「相聞」、「雑歌」、「挽歌」の部立がある。「相聞」とは「往復存問」(互の近況をたずね合い、また意思を伝える)の意味であつて、この部立にはいるものは、まず恋愛の歌を中心として、近親・友人のあいだに取りかわされた歌が主たるものである。「挽歌」は「柩を挽く」時の歌という意味であり、したがって人の死に際してそのかなしみを述べた哀傷の歌が主たるものである(もつとも、なかには臨終の時の歌や、伝説上の人物の死を追悼して後世作つた歌なども見いだされる)。「雑歌」は「春雑歌」などのように四季に分けて分類した巻などがあり、単に一般の抒情歌のみならず、「相聞」、「挽歌」以外のもものが総称されているようである。すなわち「羈旅」、「行幸」、「遊宴」、「詠物」などがそれぞれである。なお巻によつては「正述三心緒」、「寄物陳思」、「譬喻」などと、その表現法による分類を試みているところもある。

この『万葉集』は一口に「万葉仮字」といわれ、すこぶる複雑な用字法を用いており、その解説にはわれわれの先哲は文字通り精根を砕いて努力したが、今日でも依然解説できぬもの、いまだ定訓を得ないものなどを残している。その歌の序や題意をしるす時は純粹の漢文であるが、歌の記

載法には字音による記載(借音)、字意による記載(義訓または借訓)、遊戲的な記載(戯訓)などが入りまじつていて統一性がない。加うるに長い期間には伝來のたびごとにこれを筆写する際、しばしば誤記や、また意識的な書きかえなども行われたようなので、その解説はますます困難の度を加えてきたのであるが、しかしまず、今日ではその大部分は、一般がこれを鑑賞するには不便を感じないほどになった。

さて、『万葉集』は、『古事記』の原始時代らしい素朴な世界に比べて、ようやく大陸文化を取り入れ、その影響のもとに個人的自我のめざめ始めた時代の産物であつた。大化二年(645)に行われた大化の改新は、氏族制度を革新し、中央集権の政策をもつて国家統一をはかつたものである。

大陸文化は盛んに取り入れられ、国家機構は整備した。また当時の仏教文化は今日もなおみるごとく荘大なる寺院の建立、さまざまの美しい造仏の事業となつて現われた。こうした時代を背景として『万葉集』の世界は展開されるのである。もちろんその半面、人の世の暗いかげもあつたことは打ち消すことはできず、『万葉集』にはそうした暗い面もつつまず提出されているけれども、しかしその主調は、

人間が太古の原始の世界から、ようやく明かるい文化の広場に解放され、おおらかにおのれの生命力を確かめ、あすへの期待にあふれているといふべきであらう。しかもまだ文明におぼれず、疲労の色は少ない。今この世界の展開を時代を追つて以下概観してみよう。

その初期は「記紀歌謡」の世界と交錯する『古事記』の項参照。ただ次の雄略天皇の御製は、巻一の開卷第一にある歌であり、その格調は前万葉的世界を示すものとして注目すべきであらう。

籠もよ み籠持ち 堀串もよ み堀串持ち この丘に
莫摘ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ やまと
の国は おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそ
坐せ 我こそは名らめ 家をも名をも

さて、その第一期の代表歌人は額田王であらう。王は大海子皇子（天武天皇）に愛せられ、十市皇女を生んだが、のち天智天皇にも召された。かの壬申の乱（672）の裏面に泣く女性と伝えられるが、彼女の作風は女性らしい優雅さのなかにも雄渾の趣を蔵している。たとえば、

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出
でな

のごときそれであり、また、

君待つと吾が恋ひ居ればわがやどの簾うごかし秋の風吹く

などには近代的な感覚もそこから味わうことができるであらう。ここにはもはや古代人らしい素材はなく、そこにはすでに新しい時代が展開されているのを見ることができ。これらを出発点として万葉の世界は次に最盛期に進む。その完成者は柿本人麻呂である。かれはとくに国家に対する強い愛国的な情熱、皇室に対する深い尊崇の念を歌うばかりでなく、さまざまのすぐれた敘景歌・相聞歌もあり、ゆたかなことばと自在な表現法をあやつつて数多くの傑作を残した。昔から多くの人々が、かれをもつて『万葉集』の代表的歌人としているゆえんである。

近江の荒都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌
玉津 畝火の山の 樞原の 日和の御代ゆ 生れましし
神のことごと 櫻の木 の いやつぎつぎに 天の下 知
ろしめししを 天にみつ 倭を置きて あをによし 奈
良山を越え いかさまに おもほしめせか 天離る 夷
にはあれど 石走る 淡海の国の ささなみの 大津の
宮に 天の下 知ろしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮

は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の
茂く生ひたる 春立つ 春日の霧れる 百磯城の 大宮
処 見れば悲しも

反歌

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ
ささなみの志賀の大曲淀むとも昔の人に亦も逢はめやも
軽皇子の安騎野に宿りませる時柿本朝臣人麻呂の
作れる歌
東の野にかぎろひの立つ見えてかえりみすれば月かたぶ
きぬ

柿本人麻呂の羈旅の歌

としびの明石大門に入らむ日やこぎ別れなむ家のあたり見ず

柿本人麻呂の歌一首

あふみの海夕浪千鳥なが鳴けば心もしぬに古思ほゆ
次に、ややおくれて登場するのは山部赤人である。かれは
自然をきわめて美しく歌い、絃景歌人としてすぐれている。
たとえば、

田児の浦ゆうち出でゝ見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は
零りける

若の浦に潮満ち来れば湯を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る
などは古今の絶唱として名高い。また即物的に自己の生活
を歌った幾分享楽主義的な大伴旅人や人生や社会の暗い面
を率直にとりあげて歌った山上憶良、あるいは伝説歌人高
橋蟲麻呂らの名もこの最盛期の歌人として逸することはで
きない。下降期を代表する歌人は大伴家持であるが、かれ
にいたって『万葉集』はその格調の高さを幾分失い、感傷
に流れ、そこに幾分疲労の色がみえ始めた。しかし、かれ
にもまた、のちの歌集にはみられぬ明かるさをやはり見の
がすことはできない。たとえば次の歌のごときはその代表
作品である。

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴
くも

わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも
うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しもひとりし思
へば

なお『万葉集』にはこのほかにもすぐれた歌人が多く、
また一般庶民の歌として東歌および防人歌があり、また僧・
遊行女婦・乞食の歌までも含まれている。

以上概観したように『万葉集』は、真にわが国文芸史上